PISA IN FOCUS 14

education policy education policy education policy education policy education policy education policy education policy

少年少女は どんな職業に就きたいと思ってる?

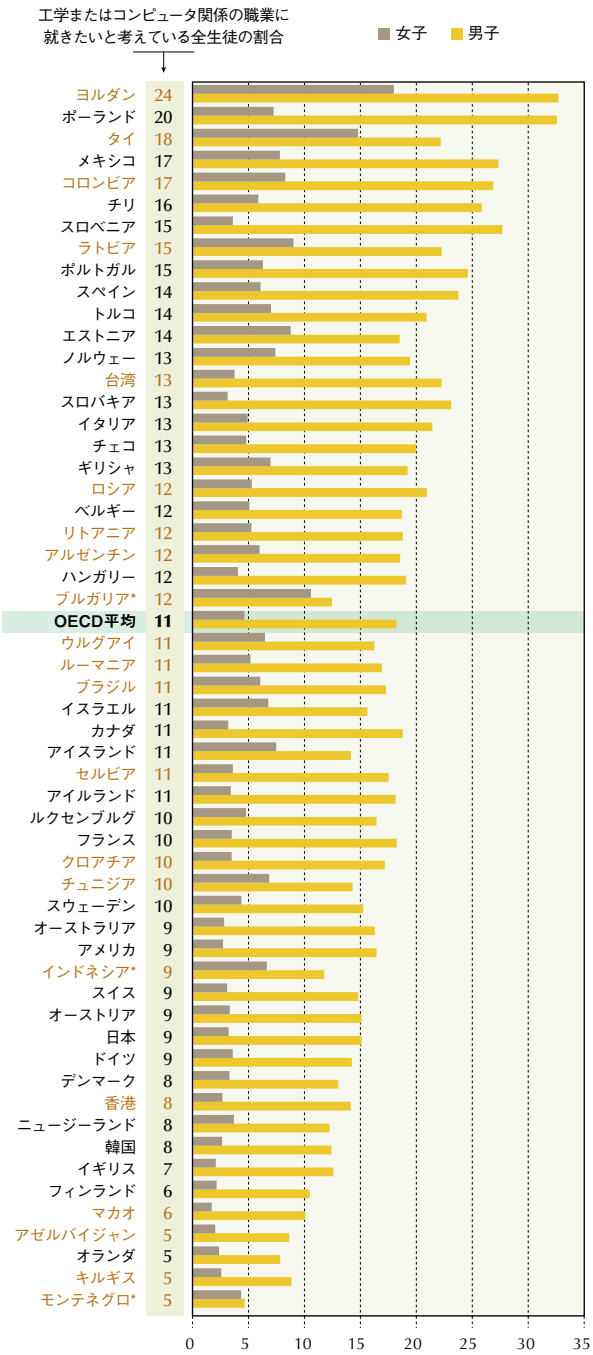
- 平均で見ると、法律関係、上級公務員、経営者及び専門家になりたいと考えている生徒の割合は、女子の方が男子よりも11ポイント多かった。
- エンジニア、コンピュータ関係の職業に就きたいと思っている生徒の割合は、OECD平均で女子はわずか5%であったが、男子は18%であった。
- どのOECD諸国でも、医療・保健関係の職業に就きたいと思っている生徒は、女子の方が男子より多い。

エンジニアの人を思い浮かべてみてください。その人は男の人でしょうか、あるいはヘルメットをかぶった女の人でしょうか?次に、クラスで生徒の前に立っている先生を思い浮かべてみてください。あなたがもし、最初の質問には“男の人”を、2番目の質問には“女の人”を思い浮かべたとしたら、おそらくそれには理由があるからだろう。その理由は簡単で、科学やテクノロジー、工学、数学といった分野の職業に就いているのは、どちらかというと女性よりも男性の方で、人文、医療の分野で職業に就いているのは女性の方が多いからである。労働市場におけるこの男女の就労の違いは多くの国で見られることである。だが、こうした傾向はこれからも続くだろうか。今日、学校のほとんどの主要教科で、女子は男子と同じか、それ以上の成績を収めていて、教科における成績は15歳児が将来就きたいと考える職業に影響を与えている。そうなの?

生徒たちが将来なりたいものは…

PISA2006年調査の生徒質問紙では、15歳の生徒に「あなたは30歳くらいになったら、どんな職業についていると思いますか」という質問をしている。ほとんどすべてのOECD加盟国の結果を見ると、男子よりも女子の方が野心的で、法律家、上級公務員、経営者、専門家といった高い地位の職業に就くと考えている女子が男子よりも割合で11ポイント多かった。これらの職業に就くと考えている生徒の割合に男女差がないのは、OECD加盟国ではフランス、ドイツ、日本だけであった。ただしスイスは、どちらかといえば概して男子の方が女子よりも野心的であるという結果であった。ギリシャとポーランドでは将来の職業に対する意識において男女差が特に大きく、法律家、上級公務員、経営者といった職業に就きたいと考えている女子は男子よりも割合で20ポイントも多かった。

工学またはコンピュータ関係の職業に就きたいと考えている男女の割合



注: 国・地域は、将来、工学またはコンピュータ関係の仕事に就きたいと考えている全生徒の割合の多い順に上から並べている。
男女差において統計的な有意差がない国・地域名には*印が付いている。
出典: OECD, *PISA 2006 Database*.

男女で異なる動機付けを持っているだけでなく、通常、非常に異なる分野の職業に就きたいと考えてもいる。OECD加盟25か国では、30歳頃になったら就きたい職業として最も多くの女子があげている10の職業のうちの1つが“弁護士”である。これに対して、男子で同様に“弁護士”をあげている国はわずか10か国である。同様に、OECD加盟20か国で、“作家、ジャーナリスト、その他文筆家”は女子が就きたい職業として挙げた10の職業のうちの1つではあるが、男子で同様に挙げた職業でこれらがトップ10に入った国はわずか4か国である。

…与えられた教科での習熟度とはほとんど関係ないかもしれない。

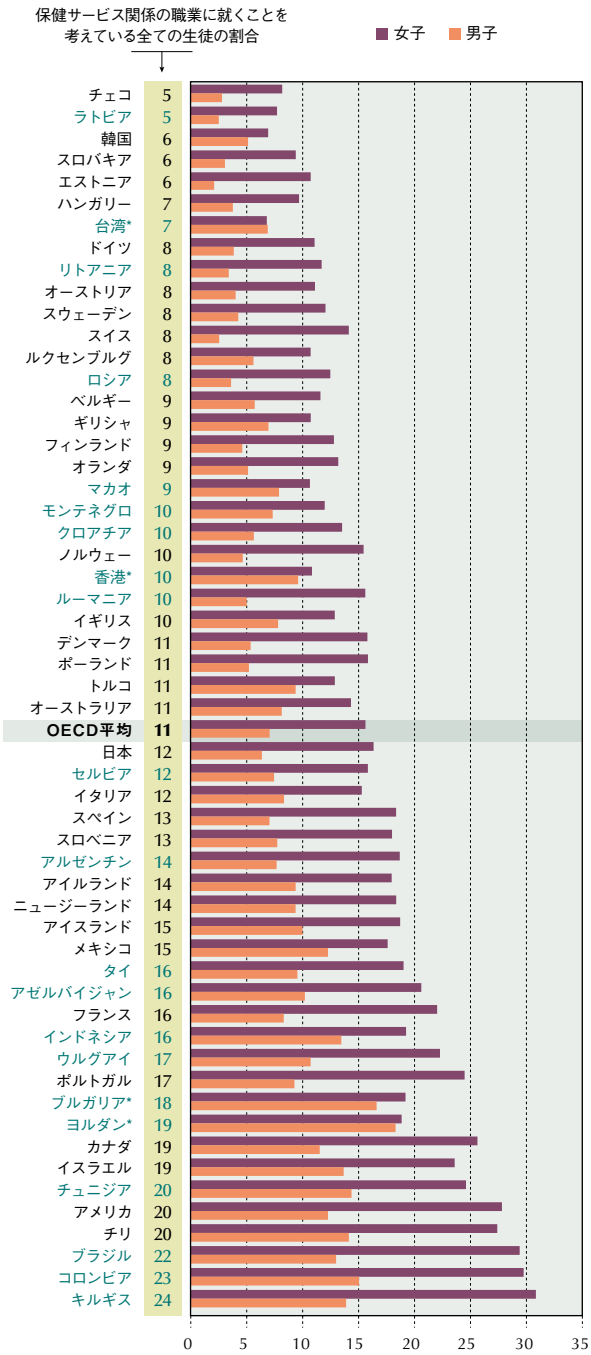
近年、多くの国で女子は科学の習熟度において男子と肩をならべるか、あるいは男子を追い越す勢いである。だが、女子が科学あるいは数学でよい成績を挙げることは、女子が科学に関連したすべての職業に就きたいと考えていることを意味するものではない。実際、“工学とコンピュータ”関連の職業は依然として、相対的にほとんど女子には魅力的ではない。30歳頃に工学とコンピュータ関係で働きたいと考えている生徒は、OECD平均で女子が5%未満であるのに対して、男子は18%である。これは顕著な例であり、コンピュータと工学の定義には建築といった分野、すなわち男女どちらかの性と関連しやすい分野が含まれているからである。

工学とコンピュータ関連の職業に就きたいと考えている生徒は、チリ、メキシコ、ポーランド、スロベニアなど相対的に割合の高い国から、フィンランド及びオランダなどかなり割合の低い国まで、国によって幅がある。OECD加盟国では、コンピュータと工学関係の職業に就きたいと考えている女子が、そうした職業に就くことを検討している男子よりも多い国はない。さらに、工学あるいはコンピュータ関連の職業に就きたいと考えている生徒の男女比を見てみると、ほとんどのOECD加盟国で男子は女子の4倍である。習熟度レベルの最も高い生徒でも職業期待における男女差が見られるだけでなく、習熟度レベルの低い生徒でも同様に職業期待に男女差が見られる。例えば、トップの成績を上げている女子の中で、工学とコンピュータ関連の職業に就きたいと考えている生徒はわずかである。

工学とコンピュータなどの科学に関連した職業に就きたいと考えている女子は少ないが、これに対して、どのOECD加盟国でも保健サービス、福祉、介護、保育関係の職業に就きたいと回答した生徒は女子の方が男子よりも多い。このパターンは、保健関係の職業リストから看護士や助産師を除いても当てはまる。看護士や助産師を除く保健サービスの職業に就きたいと考えている女子は、OECD平均で16%であり、これに比べ男子はわずか7%である。このことから、女子は科学において成績が良くてもエンジニアやコンピュータ科学者になりたいとは考えず、トップになるためのその高い意欲を、科学に関連するその他の職業、例えば保健分野などに向けていることが示唆される。

職業に対する希望や期待が、男女で異なる理由の1つとして考えられることは、労働市場が男女で棲み分けされているからかもしれないが、これは、個人や社会にとって重大な悪影響を及ぼしかねない。例えば、男女の棲み分けがなされた労働市場では、報酬と労働条件に大きな格差が生じることがある。また、労働市場に女性が参入しないことが、経済の低成長・低発展に結びつくのと同様に、学習・労働のあらゆる分野におけるポテンシャリティーを実現する上で男女間に機会の不平等があると、才能を無駄遣いしたり、人的可能性を阻害したりすることがおこりかねない。

保健サービス関係の職業に就くことを考えている男女の割合

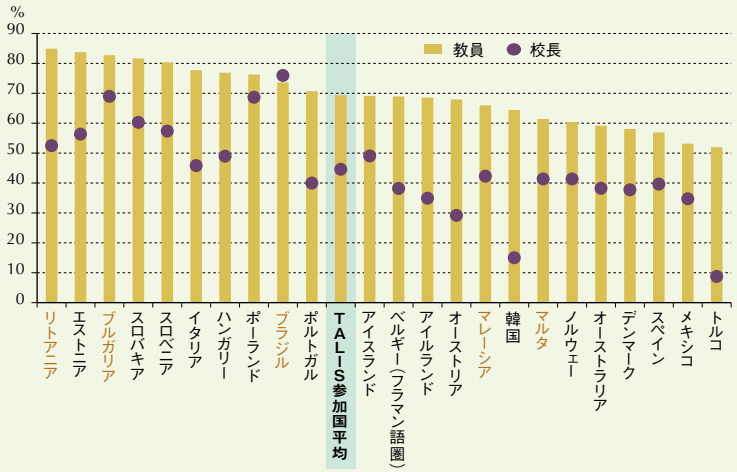


注: 国・地域は、(看護師、助産婦を除く)保健サービス関係の職業に就くことを考えている全ての生徒の割合の少ない順に上から並べている。
*印は、その国・地域の男女差に統計的な有意差がないことを示している。
出典: OECD, *PISA 2006 Database*.

男女の棲み分けが最もなされている分野は教育である。OECDの2008年国際教員指導環境調査(TALIS 2008)の第一サイクルの結果によれば、TALIS2008に参加した23か国平均で見ると、前期中等学校の教員のほぼ70%が女性で、これらのどの国でも半数以上が女性であった。また教科で見ると、女性は、数学・科学(49%)よりも言語(79%)や社会(57%)を教える傾向が見られた。

だが、校長職には男性が就いていることが多く、TALIS2008参加国平均で、校長に占める女性の割合は半分より少なかった(45%)。このことは、一般的には教育関係の職業において、男性の方が女性よりもこのキャリア・パスに進むことが多いということを示しているが、他方、ブラジル、ポーランド、そしてある程度はブルガリアでも、教員と校長職における女性の割合が同じという結果が得られた。

前期中等教育の教員と校長における女性の割合



注: 国は、女性教員の割合の多い順に左から並べている。
出典: OECD, Teaching and Learning International Survey 2008.

結論: 近年、教育における女子の進出ぶりはめざましく、今日の15歳の女子は平均的に見て男子よりも意欲的である。だが、彼らがある職業に就いたり、可能性を最大限伸ばそうとしたりする際には、依然として、実際のスキルに必ずしも関係ない要因によって決定する傾向が見られる。

本稿に関するお問い合わせ先
担当: Francesca Borgonovi *(Francesca.Borgonovi@oecd.org)*
出典: "Gendered Career Expectations of Students"

参考サイト:
www.pisa.oecd.org
www.oecd.org/pisa/infocus
www.oecd.org/edu/talis
www.oecd.org/gender/equality

次回テーマ:
「今の15歳児はどれだけ"グリーン"?」

本稿の翻訳は、日本のPISAナショナルセンターが担当しました。